

---

# 取り戻せない昔の自分

あおつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

取り戻せない昔の自分

### 【Zコード】

Z2833G

### 【作者名】

あおつき

### 【あらすじ】

とあるきっかけで、笑顔を失った少女がそれを取り戻していく話。

お昼休み、私は友達に呼び出された。話があるといつてていたけど、なんとなくどんな話かは分かる。私は何の期待もせず、友達のもとへ向かう。なんとなく、いつもと同じ結末がまつていると私には分かつっていたから。

人気の無い廊下で、私と友達は向かい合つていた。この場所に来るまで、一人は終始無言だつた。やっぱり私の思つていた通りだ。意を決し、私は切り出した。

「話つて何なの？」

「何つて、あなたのことには決まつてないじゃないの？」

彼女の表情は決して穏やかなものではなく、私に向けられている視線には明らかな敵意が込められている。私は内心「ああ、またか」と思った。

「だから何なの？はつきり言いなさいよ。」

「もうあなたとは付き合いきれないよ。あなたのうそ臭い笑顔を見るのが嫌なの。あなたの言葉も嫌なの」

私は感情を押し殺して、彼女に言葉を返す。

「話つて、それだけなの？」

彼女はじつと私を睨みつける。心中が嫌な感情でじす黒く染まつていくのが分かる。私はその場から今すぐにでも逃げ出したくなつたが、我慢した。先ほどより語氣を強めて彼女が言う

「他に何も言うことなんてないよ、あなたとなんか一緒に居たくないの。もう一度と話すことなんてない」

そのまま彼女は、去つていった。彼女のうしろ姿を見つめていると、自然と涙がこみ上げてきた。どうして、あんな言葉を平氣でいえるのだろう？ちつとも理解できない。いつも似たような事を言われて友達を失う私は、独りで居るしかないのだろうか…。私は声も

上げず、窓の外をぼうっとみつめながら涙を流していた。

どこをどう歩いたのだろう、気付いたら、私は一人屋上にいた。手すりによりかかって、一人考え方につける。友達を失うことには慣れているけど、辛いことには変わりない。始めから辛い事になると分かっているのなら、友達なんていらない。昼休みの終りを告げるチャイムが鳴ったけど、教室に戻つて授業を受ける気力はなかつた。私はそのまま屋上にいることにした。少しごらいサボつたつで、きっと誰も気にしない。みんな私のことなんてただの優等生としか思っていないから。そのイメージでしか私に接してこない、けれどそれが凄くいやで鬱陶しい。でも、私にも悪いところは沢山あるから、人を責めてばかりでもいられない。私自身がもっと強ければ、きっとこんな事にはなつていないのである。

屋上のドアのほうから、ガチャリとドアノブを回す音が聞えた。重く鈍い音がして、鉄製のドアが開いた。私は思わず振り向いて、ドアのほうを見る。

2

ある時から、私は一人でいようと決めていた。都合の良い連中と付き合うのはやめよう、そういう風に、ずっと自分に言い聞かせてきた。どうせ私のことなんて、誰もわかつてくれない。だから、毎日一人でいる。

クラスメイトは、私の事を勝手に怖がっているけど、私はそんな事、全然気にしてない。面倒くさいな、とは思つても寂しくはないから。昼休みが終わつた後、私はいつものように授業をサボるため、屋上へ向かつた。

屋上に着くと、そこには既に先客がいた。私がドアを閉めると、

そこにいた先客は、私をじっとにらみつけてきた。今にも泣きそうな、凄く寂しい目つきで。よくよく、顔を見てみると、その先客はクラスメイトの一人だった。普段は優等生で、しつかりしている彼女が、何故この時間にこんなところにいるのか、私は不思議でならなかつた。その上、今にも泣きそうな表情をしていたから、放つておけなかつた。

「あなた、だれ？」

彼女は冷たい声で私に言った。少し声が震えている

「……、同じクラスの向野だけど？ わからない？」

「私、クラスメイトの名前、殆ど覚えてないから」

「あんた、木村さんだよね？ いつも学年トップの、なんであなたみたいな子が、サボつてんの？」

3

突然来た女の子に、いきなり話しかけられて、私はどうして良いかわからなかつた。でも、この人もお決まりの成績優秀という言葉を私に向けてくる。きっと、この人も勝手に私の事を想像しているに違いない。そう思うと、なんだか腹が立つてきた。

「なんだって良いじゃない、サボりたいからサボつてるだけ！ それに、私は優等生でもなんでもない！ 勝手に人の事想像して、幻想を抱かないで、もう、うんざりなの」

「ちょ、ちょっと待つてよ。なんだか知らないけど、私、あなたに危害を加えるつもりなんて無いから、誤解しないで」

「だったら、構わないで。私は一人でいたいの」

「そんなに寂しそうなのに、そんなに辛そうなのに、木村さんは一人でいたいの？」

「なんで？ どうしてそんな事が、この人はわかるんだろう、私は一

4

言も、そんなことを口にした覚えはないの。私は、近づいてくる彼女に、何一つ言葉をかけることができなかつた。

「となり、いい?」

「好きにして、断つても、どうせ来るんでしょう」

「……まあね」

「ううとうしいな、と思いつつも、私はどうか安心していた。

「あの……」

「なに?」

「どうして、私が寂しそうだなんて、言えるの?」

向野さんは、私の顔をじっと見て答えた。

「なんとなく、かなあ。声も震えてるしさ、表情も不安そうだし。それにあなた、よほどの事が無い限り授業サボつたりしないと思うし、ってまあ、これは私の勝手な想像だけどさ」

「……」

向野さんの言つている事は、殆ど当たつていて、私は言葉を返す事ができなかつた。そんなに私つて、わかりやすいのかな。単に、向野さんが鋭いだけなのかな。そんな私を尻目に、向野さんはしゃべりかけてくる

「木村、何があつたのかしらないけど、私でよければ話し聞くよ? あ、嫌ならいいけど」

どうしてこの人は、私の心にズカズカ踏み込んでくるんだらう。でも、始めて手を差し伸べられたようで、凄く嬉しかつた。

「良いの……?」

「だつてさ、そんな辛そうな顔してるのに、放つておけないもん。ごめんね、おせつかいで」

「ありがとう……」

「いいよ、お礼なんて、木村の事が放つておけないから、聞いてるだけ」

なんで、向野さんは、「こんな私に優しくしてくれるのかな……。

そんな風に考えていると、涙がボロボロ出てきた、止めどなく流れ

てくる涙を、私はどうする事もできなかつた。そんな私を見て、向野さんは心配そうに、声をかけてきた。

「ちょっと、大丈夫？ 辛いなら、座る？」

「あ……、うん。」めんなさい

「大丈夫？」

「うん……、平気

「そう、平氣なら良いんだけど」

そういうと、向野さんも腰を下ろした。向野さんは、私のほうをじっと見つめている。

「それで、何があったの？」

「えっとね……、友達と喧嘩しちゃつたの」

「ケンカ……か、そんなに落ち込んでいるって事は、何か酷い事でも言われたの？」

「うん……」

「どんな事、言われたの？」

「笑顔がうそ臭いとか、私の言葉が嫌とか、一緒に居たくないとか、そんな事。どうしてそんな酷い事を、平氣で言えるのかな？」

向野さんは、ただ私のほうをじっと見つめて、私の話を聞いている  
「私は普通にしているだけなのに、ひどい事を言われる私は、どうすれば良いの？ 誰かと一緒にいて、辛い思いをするぐらいだつたら、一人のほうが楽だよ！」

何ではじめて話す人に、こんな事を言つているのだろう？ 話した  
つて、引かれるだけかも知れないのに。また、ひどい事を言われる  
かもしれないのに、なぜ私は、向野さんにこんな事を言つているん  
だろ。自分で自分の行動が、全く理解できない。

「……あのね、言いたい人には言わせておけば良いの。そんな酷い  
人のために、木村が自分自身を抑える必要なんてないんだよ。それ  
にさ、一人は乐ぢやないよ。自分に無理をするのも辛いけど、一人  
はもつと辛いよ……」

「わかつてるよ、そんなこと」

「え……？」

「そう、わかつてゐる。一人が辛い事なんて、誰も味方してくれない事が辛いなんて、ずっと……、前から。

でも、向野さんに心を開いて、また嫌われたりしたら怖い。それに、どうやって心を開いたら良いのか、全くわからない……。

「ん? どうしたの?」

私は、どうしたら良いんだろう……。

4

私が一人で本を読んでいると、クラスメイトがよってきて、いつも酷い事を言つてくれる。

「あんた、うざいよ」

「見てるだけでむかつく、死んじやえれば良いのに」

「そうだよねえ、こんなやつ、学校に来なきゃいいんだよ

「良い子ぶつて、なに本なんか読んでるのよ」

「ちがうよ、本しか友達がないんだよ」

「そつかあ、じゃあこうしちゃえ」

いじめっ子の中の一人が、私の読んでいる本を取り上げて、ゴミ箱に投げ入れた。

「あはは、あなたの友達、ゴミ箱に入っちゃった、良いの? 助けに行かなくて?」

「……んで、何でこんな酷い事するの? 私、何か悪い事した?」

私が抵抗しようとするが、どこからか濡れた雑巾が飛んできて、私の顔にぶつかった。びちゃつ、と嫌な音がした。雑巾が飛んできたほうを見ると、男の子が私のほうを見て、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。

「ちょっと、どうしてくれるのでよ。あんたのせいで、私の服が汚れ

たじやない、弁償してよね、この不潔女

椅子を蹴りながら、私の近くにいた女の子が、そんな事を口走つ

た。

「私、何もしてないじゃない」

「なにいつてんの？ やつぱウザイよここつ」

「ねー、いるだけで悪いもんね」

「そうそう、クラスの空氣悪くなるよね」

「死んじやえば良いのに」

それを聞いた一人が、花瓶を持つてきて、私の机の上に置いた。花瓶を落とす音がうるさい。

「ほら、これで死んだよ」

「きやははは、あんた良い事するねー。あー、おなか痛い」

「やめて……、いい加減にしてつ」

「なによ？ なんか文句あんの？」

「やつて良いこと悪いことがあるじゃない、そんなことも……」

「あれー、なんか聞えた？」机の席の人、死んじやつたはずなのに

声がしたよ？ まさか幽霊？

「えー、やだあ、そんなの気のせいだよー」

「だよねー、聞えるはずないもんね」

私は、勢い良く立ち上ると、机の上にある花瓶を腕ではねのけた。机から勢い良く弾き飛ばされた花瓶は、床に落ち、派手な音を立て粉々になつた。

「いい加減にしてよ！ 私がいるとクラスの空氣が悪くなる？ 空氣を悪くしてるのはあなたたちじゃない」

「はあ？ 何言つてるの、あんたがいなきゃ誰もこんなことしないの、わかるよね？ あんたがいなくなれば、平和になるの。もつさと、壊した花瓶片付けなよ、この『キブリ女』。お願ひだから、学校に来ないで」

「そよう、もう来なくて良いよ」

「ていうかさあ、自殺とかしてくれないかな？」

「あつ、いいねー、それ。大賛成」

「ほら、この花瓶の欠片で手首切りなさいよ」

そんな風に言って、とがった破片を私に手渡してきた。でも、私は無視を決め込んだ

「……」

「なに？ また泣くの？ 大好きな先生が来るよー、泣けば誰か助けてくれるとでも思ってるの？ このクズ」

「勉強だけできても、あんな友達居ないもんねー。正直いって、あんたなんかと誰も友達になりたいって思ってないよ。先生も、あんたは問題よく起すから面倒だつて言つてたよ。わかった？ あんたの味方なんて、このクラスには誰一人いないの。あんたは一人なのよ、一人。わかる？ この言葉の意味。わかるよねえ、学年一位でお金持ちのお嬢様なら」

私は、何を言われてもひたすら無視していた。反応がないから飽きたのか、彼女たちは廊下に出ておしゃべりを始めた。私は、ゴミ箱に捨てられた本を見つけると、席に戻った。廊下のほうから声が聞えてくる

「ねえ、今の見た？ ゴミ箱あさつてたよ」

「うええ、きつたなーい」

「とても、お金持ちのお嬢様にはみえないよねえ」

「私たちとは住む世界が違うから、ゴミ箱あさるのが普通なんだよ、きつと」

「あー、やだやだ。あんな汚い子、早くどうにかなっちゃえばいいのに」

四年前、私がまだ小学生だった頃。酷い虐めを受けていた。毎日が地獄のようだつたけれど、私は屈せず、学校に通い続けた。先生までもが虐めに加担していたから、私は本当にクラスの中で独りだつた。

あの頃の事を思い出すと、人を信じて良いのかわからなくなる。正直言つて、もう一度とあんな経験はしたくない。

「ちょっと、木村！？ねえってば、大丈夫？」

「えっ？」

「どうしたの？大丈夫？急に黙つたと思つたら、いきなり涙流すし

……」

そう言われて頬に手をやると、涙で濡れていた。

「じめん、ちょっと、昔の事思い出しちゃって……」

「昔の……、事？」

「うん……、私ね、小学生の頃、ひどい嘘めを受けていたの」

「そう、なんだ。どうして？」

「この人は、大丈夫なのかな。信じても、良いのかな。

「わからない。私はただ、普通にしていただけ。ちょっと成績がよくて、泣き虫だったからなのかな。あとね、家がお金持ちだったから、それもあるのかも」

「私も、成績が良いつてだけで、嘘められてたこと、あるよ。だからね、木村の気持ち、何となくわかる」

「え……」

「嘘められてたとき、ずっと独りで凄く辛かった。何度も死のうかとも思つたよ。でも耐えた、どんなに辛くても、逃げなかつたよ。ま、今でも一人だけね」

あまりに、自分と境遇が似ていたから、ちょっとびっくりした。でもそれが、向野さんを信じてみようという気持ちを、後押ししてくれた。この人なら、きっと裏切らない。そういう確信が、私の心中に芽生え始めていた。

「私ね、一人が辛くなると、いつもここに来るんだ。実は、すごい寂しがりでさ……、普段不良っぽくしてるのは、ただ強がってるだけなの。でもね、人から好かれるために、愛想笑いしたり周りに合

わせたり、そういうのはできない。どんなに寂しくても、自分に嘘つくる、嫌だから。」

「うん」

「一人も辛いけどさ、自分を偽るのも辛いから。木村もさ、辛いのわかってるなら、強がらないで、自分らしくしたほうが楽だよ。自分は殺すものじゃない、活かすものだって、私のお母さんが、いつも言つてる」

私は向野さんの言葉を、涙無しに聞く事ができなかつた、彼女の言葉一つ一つから本当に私の事を思つてくれてるんだなつて、伝わつてきたから。あふれる感情を、抑えることができなかつた。

「うん……」

「だからさ、周りのイメージなんて気にしちゃ駄目だよ、何と言われよう、自分らしさは捨てちや駄目だよ」

私が一番、自分のイメージの事を気にしていたのかかもしれない。だから、うそ臭い笑顔をまわりに振りまいていたのかもしれない。知らず知らずのうちに、私は自分を偽ることを、逃げ道としていたのかもしれない。向野さんは、強い人なんだな、この人なら、信じられる。きっと、私を裏切らない。

「私、自分が一番辛いとばかり思つてた」

「そつか」

「でも、辛いのって、私だけじゃないんだね」

「そうだよ、誰だって辛い思いはしてる。それにさ、木村は一人じやないよ」

「え？」

私は何のことかわからず、一瞬きょとんとしてしまつた。

「私でよければ、いつでも相談乗るし。私は、木村のこと捨てたりしないから」

その言葉を聞いて、私は思わず泣き出してしまつた、大声を上げて。きっと、この人と一緒なら大丈夫だ、ありのままの自分でいる。私は涙ながらに言つた。

「ありがとう、向野さん」

向野さんは、恥ずかしそうに私から視線をそらした

「そんなに改まって言わないで、恥ずかしいよ。あ、あとその、向野さんっていうの、やめて。私のことは夕実で良いから」

「うん、わかった。夕実は、優しいんだね。私ね、夕実の言葉で、大分前向きになれたよ。本当にありがとう」

夕実はさつき以上に照れたのか、そっぽを向いてしまった。

「わ、私はただ、辛そうな木村を放つておけなかつただけ。優しくなんかないってば」

「あれ？ もしかして照れてる？」

「そつ、そんなことないってば。もうっ、それ以上言つと怒るからね」

なんだか、照れてる夕実を見ているのが、おかしくて、思わず笑ってしまった。

「ふふつ、じゃあ、もういわなーい」

「今の木村、良い顔してるね。さつきの暗い感じが嘘みたい」

「だつて、照れてる夕実がなんだかおかしくって、あははは」

夕実は、顔を真つ赤にして私に反論してくる

「あーもうつ、怒るからね！木村のイジワルー！」

「怒らないでよー？私はイジワルじゃないよ。それにね、照れてるのを認めない夕実が悪いの」

夕実と一緒になら、私は笑つていられる。もう一人じゃないから、きっと大丈夫。これから先も、ずっとずっと、こんな風に笑つていられるといいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2833g/>

---

取り戻せない昔の自分

2010年10月23日01時20分発行